大宮 まちづくり新聞

Vol.015
2023年6月1日発行
OMIYA LIBRARY

図書館のご近所さん
発酵ジンジャーエール「しょうがのむし」

凛々しいちょんまげと和服スタイルが目を引くオーナーの周東孝一(しゅうとうこういち)さん。さいたま市見沼区にて発酵ジンジャーエールの製造・販売をおこなう「株式会社しょうがのむし」を経営されています。日本初の発酵ジンジャーエールの醸造所を造られたきっかけや、見沼区の休耕地問題の解決にもつながる活動についてお話をうかがいました。

―販売されている発酵ジンジャーエールとは？

生姜や柑橘類、砂糖などを混ぜ、発酵させた飲料で、現在のジンジャーエールのルーツとなった飲み物です。英語ではジンジャービアと呼ばれていますが、ビアというとお酒やビールに思われてしまうため、製造過程で必要な「発酵」日本でも聞き馴染みのある「ジンジャーエール」という2つのキーワードから「発酵ジンジャーエール」と命名しました。原材料は無添加・無着色・無香料にこだわり、弊社が使用する生姜は創業当初から変わらず、100%さいたま市の見沼区にて生産したものを使用しています。ノンアルコールですので、お子様はもちろん妊娠中・授乳中の方、運転中でも安心してお飲みいただけます。

―発酵ジンジャーエールをつくるきっかけは？

はじめのきっかけは、妻の実家がある台湾へ帰省をしたときのことでした。農家さんからいただいた大量の生姜を家族が持て余して困っていたので、その生姜を使ってジンジャービアを造り、義父母やご近所に振舞ったところ大好評。台湾ではジンジャーエールさえ知名度が低いのにも関わらず、初めて飲む味わいでも多くの人が抵抗なくおいしいと飲んでくれたことが強く印象に残っていました。もうひとつのきっかけが、見沼区は休耕地が多い土地であると気づいたことでした。毎週、妻と一緒に自宅近くの農家さんの元へ採れたての野菜を買い求めていた道中で、一年中何も植えていない田畑がたくさんあることに気づきました。見沼区はもともと生姜の生産が盛んな地域ということもあり、この土地を活用して原材料の生姜をつくれないかという考えが思い浮かびました。

―休耕地の活用についてより詳しく教えてください。

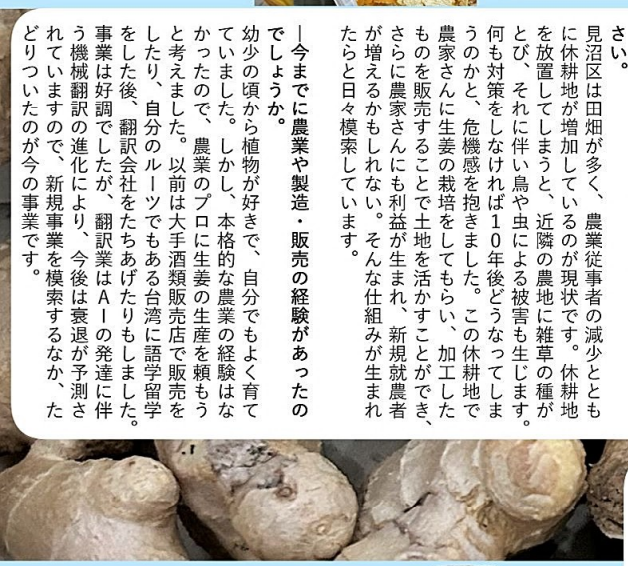
見沼区は田畑が多く、農業従事者の減少とともに休耕地が増加しているのが現状です。休耕地を放置してしまうと、近隣の農地に雑草の種がとび、それに伴い鳥や虫による被害も生じます。何も対策をしなければ10年後どうなってしまうのかと、危機感を抱きました。この休耕地で農家さんに生姜の栽培をしてもらい、加工したものを販売することで土地を活かすことができ、さらに農家さんにも利益が生まれ、新規就農者が増えるかもしれない。そんな仕組みが生まれたらと日々模索しています。

―今までに農業や製造・販売の経験があったのでしょうか。

幼少の頃から植物が好きで、自分でもよく育てていました。しかし、本格的な農業の経験はなかったので、農業のプロに生姜の生産を頼もうと考えました。以前は大手酒類販売店で販売をしたり、自分のルーツでもある台湾に語学留学をした後、翻訳会社をたちあげたりもしました。事業は好調でしたが、翻訳業はAIの発達に伴う機械翻訳の進化により、今後は衰退が予測されていますので、新規事業を模索するなかで、たどりついたのが今の事業です。

発酵ジンジャーエールを製造するための発酵タンク

手作業で一つずつ丁寧に仕込み作業をおこなう手元には大量のシラヌイが。数量限定の新商品「夜の不知火(シラヌイ)」は果汁を23%も使用した贅沢な一品



この仕事は今までの仕事とまったく真逆。マーケットすらなく、ジンジャービアの認知度もない。やってみたいと強く感じ、知人に勧められた『世界を変える起業家』ピジコンinさいたま2019に参加をし、グランプリを受賞することができました。コンテストに参加をしたことで、より具体的に事業化を進めていくことができました。

―今まで自分の経験のないことに挑戦する不安はなかったのでしょうか。

自分の強みは一つだけあって、それは自分が無知だということを理解していることです。やってみたいことがあったら、とにかく動く。ネガティブなこともポジティブなことも起こるとは思いますが、わからないことはなんでも人に聞く。教えてもらう。そうやって一から創業していきました。まずは自分からアクションを起こすことを大事にしています。

―さいごに余談ですがちょんまげスタイルの理由は？

和服とちょんまげは、単純にカッコいいと思ってやっています。

見沼区で生まれた発酵ジンジャーエールを日本全国に、そして世界に届けようとする事業への熱い思いをもつ周東さん。さいたま市から世界に羽ばたくラスト・サムライの今後の活躍に目が離せません。

発酵ジンジャーエールは冷やしてそのまま飲むのはもちろん、お酒の割り材としても使えるとのこと。アルコール飲料のように肉料理や日本食に合うフレーバーも多数揃っていました。

株式会社しょうがのむし
埼玉県さいたま市見沼区大谷1262-3
TEL 050-5579-4606
オンラインストア https://gingerbug.thebase.in/

しょうがのむし公式ストア

大西民子の一首

たれも同じ不安を持ちて働くと
階段を書庫へくだるとき思ふ

『雲の地図』より

職場ではいつも明るかったという民子ですが、何か他人に相談できない仕事の悩みもあったのでしょうか。かつて民子の働いていた浦和図書館は、書庫が地下にあったそうです。

ゆかりの文学コーナー
『武蔵国の物語Ⅱ』より「寿能城物語」

レファレンスカウンターに座っていると、時折、寿能城についての質問を受けることがあり、回答には史実を的確に記した本や、その元となった史料をご案内することになる。そこで今回はこの紙面を借りて、小説「寿能城物語」をご紹介したい。

寿能城は1560年頃、現在の大宮区寿能町に岩付(後の岩槻)城の支城として築かれ、城主を太田資正(おおたすけまさ)の四男である潮田資忠(うしおだすけただ)として太田氏の軍事拠点とされた。築城の理由は、当時、武蔵国が関東進出を狙う小田原北条氏と関東管領上杉氏の争いの場として重要な土地であったことにある。しかし、豊臣秀吉の北条征伐により、わずか30年で小田原城と運命を共にし落城した。

物語はこの30年間を描いたものである。作者の飛田多恵子氏は近隣の大宮北中学校に長年勤務した経験から、「どんな城なのか」と素朴な疑問から出発して調べ、「一代限りの城主潮田出羽守資忠(うしおだでわのかみすけただ)という人物がこの地に存在したという事実を記しておきたい」と執筆したという。寿能城そのものについては史料が乏しいため、城主潮田資忠の視点により父や兄弟のことが語られる部分が多くなっているが、それでも作者の意図は十分に伝わっている。

80ページほどのこの作品が収められているのは『武蔵国の物語Ⅱ』で、さいたま市内の図書館では3冊しか所蔵していない貴重な本である。そのうち1冊は保存用だが、2冊は貸出ができる。史実とフィクションの間を探りながら読むのも、ひとつの楽しみ方だろう。

現在の寿能城跡には、資忠の墓碑が残っている。それは、戦火を逃れた子孫が供養のために建てたものだという。物見櫓(ものみやぐら)の跡と伝えられるその場所は現在、公園となっており、子どもたちの元気な声が響いている。

取り扱った本
『武蔵国の物語Ⅱ』飛田多恵子／著　日本図書刊行会　2003年

参考文献
『大宮のむかしといま』p43-48　大宮市　1980年
『寿能城と戦国時代の大宮』大宮市立博物館／編　大宮市　1990年
『寿能の歴史』「寿能の歴史」編集委員会／編　大宮市　1973年

大宮20景

風爽やかな緑の広場 大宮第三公園

桜のまだ残る天気のいい日に大宮第三公園に取材に行ってきました。

大宮公園駅から小動物園・県営球場を抜けて見沼代用水脇の道をてくてく歩き、第二公園から水色の歩道橋を渡って大宮第三公園に到着。

芝生が広がるこの公園では、テントを張ったりレジャーシートを敷いたりしてピクニックに興じる人や、見沼田んぼの自然と景観を眺めながら犬や子供と散歩をする人の姿が景色になじんでいます。遊具があるのは第二公園の方ですが、スケートボードやジョギングで走り回りたい、ボール遊びをしたいならこちらもおすすめです。

丸い広場

木々を見上げると鳩が。

バードをウォッチングするための小窓

園内にはバラのアーチや緑のガゼボ(西洋風のあずまや)など、季節の草花を楽しませる工夫が随所にちりばめられています。去年の夏は福島のひまわりの種を全国で育て取れた種を福島に還す「福島ひまわり里親プロジェクト」の参加地としてプロサッカークラブ大宮アルディージャと連携し、大輪の花を咲かせました。

沼の近くの野鳥観察舎では、人の気配を感じられないよう配慮のされた小窓が並んでおり、野鳥がのびのびと生活する様子を観察することができます。この近くで見られる鳥の紹介や観察のコツが書かれたボードもあり、バードウォッチングをしながら学べます。

大宮公園・第二公園・第三公園は、合わせてさいたまスーパーアリーナおよそ16個分もあるので、ゆっくり歩きながらお気に入りのスポットを探してみてはいかがでしょうか。

休園日　毎月第1月曜日(休日の場合は翌日)及び12月第2月曜日、12月31日、1月1日

開園時間　公園部分は常時開放

緑のガゼボ

バラのアーチ

街灯の形がかわいい

くるくるクーポン

おおみや読書バトン

第10回テーマ『原動力』

先日、自宅の前にある小学校から金管楽器の音色が聞こえてきて、ふと自分の学生時代のことを思い出していました。私は中学高校と吹奏楽部に所属しており、いろいろなイベントや演奏会に向けて日々練習に励んでいました。なかでも特に力を注いでいたのが、毎年夏に行われる吹奏楽コンクールに向けた練習でした。コンクールの時期が迫ってくると朝から晩まで毎日練習し、部員たちも疲れてくるせいか、心なしか部内の雰囲気もピリついた様子になり、身体的にも精神的にも辛くなってくるのが毎年恒例でした。練習は辛く大変でしたが、共に切磋琢磨してきた仲間たちと一緒にコンクールで金賞を受賞して次の大会への出場権を獲得するという目標が、部員のモチベーションとなり、日々の練習の原動力となっていたと実感しています。

そんな吹奏楽部員たちの思いを書籍化しているのが『吹部ノート』です。この本は著者のオザワ部長が全国各地の学校を取材し、全日本吹奏楽コンクールに挑む吹奏楽部員たちが実際に綴った練習の振り返りノートや、顧問へ練習に向けた心境を伝えるノート、部員仲間同士の寄せ書き、コンクール楽曲の楽譜への書き込みなどをもとに、9つの高校の吹奏楽部員たちの大会までの軌跡を辿るノンフィクション・ドキュメントです。辛い練習をこなす彼らの原動力は何だったのか……それぞれの想いが読者の心にまっすぐ響く作品となっています。

この本を読んでいると、当時学生だった頃の気持ちが鮮明に思い出されて、懐かしい気持ちと共に熱い想いが蘇ってくるような気がします。一言で表現するのであれば、まさに「青春!」といった気持ちです。

ということで、次回の読書バトンのテーマは「青春」です。

紹介した本
『吹部ノート
―全日本吹奏楽コンクールへと綴られた想い ひたむきな高校生の成長を追いかける―』
オザワ部長／著
ベストセラーズ　2015年

紹介者　糖質オフ

わたしのすきなえほん

私が好きな絵本、それは『バムとケロのにちようび』だ。

小学校高学年になって、絵本を読むなんて恥ずかしいと思っていたときに出会った本である。図書館で、妹が借りる本を選んでいるときだった。自分の用事だといくら時間がたっても気にならないが、せっかちな私はなんでもいいから借りればいいじゃないかと思いながら一緒に絵本コーナーにいた。ただいるだけでは暇なので、近くにあった好みの表紙の絵本を読んでみることにした。それがバムケロである。好きすぎて「と」を略している。

バムは世話焼きでケロは自由奔放である。キャラクター達も、この絵本に出てくる家も、部屋も、お風呂も、ドーナツもすべてが好きだ。なんておしゃれな絵本なんだろう。この絵本の良さを他の子どもがわかるのか、と自分も子どものくせに少し反抗期気味に思っていた。そして、絵本はいくつになっても読んでいいのだと気が付いた。小さい子どもが読むものだと、恥ずかしがって読まないという選択をするよりも、出会えた感動のほうが上回った瞬間だった。

大人も子どもも年齢問わず絵本ライフを満喫してほしい。

『バムとケロのにちようび』
島田ゆか／著
1994年

「しょうがのむし」周東さんおすすめの本

「図書館のご近所さんとお話しようかがった」

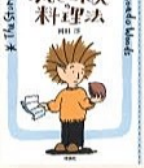
『ぼくは勉強ができない』 山田詠美／著 新潮文庫　1996年

インパクトのあるタイトルに惹かれ、高校生の頃に読みました。自分が思春期を迎える時期に指針となるような本でした。この小説の主人公も高校生で、その当時の自分と重ねあわせながら読むことで、共感する部分が多くあり、言葉にできない抽象的なことを具象化してくれたように思います。

『本所おけら長屋シリーズ』 畠山健二／著　PHP研究所

知人の紹介で読みはじめました。高校生の頃から落語を聞いているので、この小説の落語のようなはなしはこびに、すごく親しみを感じました。江戸時代を舞台にした話で、時代小説を普段あまり読まない私でも、とても読みやすかったです。

『ふしぎな木の実の料理法』 岡田 淳／著 理論社　1994年



小学生のころはお菓子をつくるのが好きで、家にお客さんが来るとよく手作りのお菓子をふるまっていました。食べ物をつくるのが好きなところから、題名が気になり、初めて自分が読みたいと思い購入した活字の本です。存在しない木の実をどうやって調理をするのか考えている主人公。調理法がわからず、住民一人一人に聞きに行きます。主人公の行動が今の自分とも似ていて、もしかしたら自分のルーツになっているのかもしれません。挿絵もみているだけでもわくわくするものばかりで何度も読み返した記憶があります。漫画ばかり読んでいた自分に、読書は思っていたよりもハードルが高くないものだと気づかせてくれた1冊です。

大宮図書館 ホームページ

大宮図書館 twitter

twitterではイベントやスタディーコーナーの待ち人数など大宮図書館の情報を日々つぶやいています。ぜひ、フォローしてみてくださいね！

この刊行物の書影画像はBOOKデータASPから引用しています。